

先週の礼拝メッセージ(2023年4月2日)

「十字架につけろ」 マタイによる福音書 27:15-26

今日は「棕櫚の聖日」です。イエス様がロバに乗ってエルサレムに入って行かれた日です。人々は「ホサナホサナ」とイエス様を大歓迎しました。(マタイ 21:7-11) その時に人々が道にナツメヤシの葉を敷いて迎えたことから「棕櫚の聖日」(PALM SUNDAY)と呼ばれています。それからたった5日後の金曜の朝には、同じ人々が「イエスを十字架につけろ」と叫んだのです。この変わりようには理由があります。

当時、馬に乗って中心的な町に入るといえるのは、王様の行動でした。そして民は自分の上着やシュロの葉を道に敷いて、王様を迎えたのです。ですからイエス様を大歓迎した人々の行動は、ロバに乗ってエルサレムに入られたイエス様を人々は自分たちの王として迎えたこととなります。これらの行動は、当時エルサレムを統治していたローマへの反逆罪です。しかし人々の一連の行動は、王としてこられたイエスが、ローマを倒して自分たちの王となり、イスラエルの独立を成し遂げると期待しての行動でした。それなのに、王だと期待していたイエスが、なんと金曜日の朝にはローマに捕えられ裁判にかけられようとしているのです。これは一大事です。なぜなら、ローマの許可なく自分たちの王を迎えるという反逆罪を人々は犯してしまったことになるからです。自分たちは殺され、町は破壊されてしまうでしょう。エルサレムが滅ぼされるということは、彼らにとって最も大切な神殿も壊されるということの意味します。そうなる前に、彼らはなんとしても、イエスを王として迎えた事実をひっくり返さなければならなかったのです。ですから、民衆は自分たちの命を守るために「イエスを十字架につけろ」と叫んだのです。総督ピラトはどうでしょう。彼は聖書にも記されているように、イエス様が無実だとわかっていました。彼の妻からも、イエスと関わらないようにと頼まれていました。しかし彼は、最終的にイエス様を十字架につけることに同意しました。なぜでしょう。それは、民衆が「十字架につけろ」と叫んで暴動へと発展してしまいそうな様子を見て恐れたのです。ローマ総督の最大の任務は、町の安全と平和を守ることでした。ですから自分の任地で暴動が起こったりすれば、左遷か、最悪の場合、彼自身が死刑に処せられる恐れがあります。ピラトも自分の地位や命を守るために、イエス様を十字架につけることに同意しました。もちろん祭司長や律法学者など宗教の指導者たちは、イエス様を妬んで訴えているのですから、イエス様がいなくなれば自分たちのメンツが保たれるのです。民衆とピラト、宗教の指導者たちの利害が一致しました。それは自分たちの都合、保身でした。

罪の本質がここに 있습니다。それは自己中心です。自分の都合が悪くなれば、人は嘘をつき人を傷つけ、責任転嫁します。彼らは自分の身を守るためだったら、無実のイエス様を死刑にしても構わないと考えたのです。

私たちはどうでしょう。もし私がイエス様の裁判の場にいたとしたら、もしかしたら、いやきっと彼らと同じように「イエスを十字架につけろ」と叫んでいたでしょう。これが自己中心な人間の姿なのです。

しかしイエス様は、そんな自己中心な私たちのために、ご自分の栄光をすべて捨てて人となって来てくださり、罪のないお方が不当な裁判にかけられ、反抗も言い訳もすることなく十字架の死へと従ってくださったのです。それどころか十字架の上で、祈ってくださったのです。

「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」(ルカ 23:34)

当然十字架刑は、酷く、その痛みや苦しみ、辱めは計り知ることができないほどです。しかしイエス様は、十字架によって多くの人々が救われるという喜びをもって十字架を忍べられたと、フィリピ書やヘブライ書に記されています。

「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」ヘブル人への手紙 12章2節 新改訳

そして、息を引き取られる直前に「完了した」(ヨハネ 19:30)と宣言されたのです。救いのわざがこれで完全なものとなったということです。

文字通り、イエス様は私たちのために、喜びをもって苦難を受けてくださったのです。クリスチャンとはこのイエス様の苦しみと愛を知った者たちです。ですから、キリスト教の歴史の中で多くの人々が迫害を受けても信仰を守り、殉教し、あるいは地位も名誉も財産も捨てて福音を伝えるために働きました。神のため人のために、愛を表すことができるようになった人々によって、福音は伝えられ、教会は建てあげられたのです。彼らの働きがあったからこそ、今、私たちは福音を聞き、クリスチャンとしてここにいるのです。「ホサナ」と迎えた人たちが、「十字架につけろ」と叫んだ、まさにその姿は罪人の私たちの姿です。自己中心というイエス様を十字架につけるほどの罪を持った私たちが、イエス様と出会い、罪赦され、新しくされたのです。十字架上で「父よ彼らをお赦しください」と祈ってくださったイエス様は、今も私たちのために取りなしてくださっているのです。この素晴らしい恵みを私たちは受け取り、イエス様にあって歩み続けようではありませんか。